

# ‘お κόσμος, αλλοίωσις· ο βίος, υπόληψις.’

112号 1998.4.11  
文・編集・発行  
恋 怪子

人間は人間である。いつかは死ぬ。こんな言葉を読んでもちっともこわくない。では、行き止まりのトンネルに猛然と突進している列車に乗っているとしたらどうか。そっとするし、こわい。芸術家としての仕事は必然的にきみをきみの現実と免れることのできない死に直面させる。きみはこれを乗り越えなければならぬ。画家はとりつかれたように絵の具を使い、ミュージシャンは際限なく弦をかきながら、詩人は何回も何回も言葉を書きなおすことよって恐怖を乗り越える。それはきみ個人の現実がとりもたず普遍的な現実だからである。こうした色や音や言葉がきみにとって真実になれば、それらは奇跡的なことに他人にとっても真実となる。個人を徹底的に貫くことでみんなとつながるのである。免れえない死の終わりに生をつぎがある。きみのトンネルの出口には光が待っている。

モーツァルトの楽節に集中できなくなったり、なにもかもうまくいかなかったりしたときは、必ずもうすぐ光が見える」と自分に言いかけよう。行き詰まってキャンパスに近づくとできない画家や、ノートを一枚一枚のみくしゃみにしている詩人に、トンネルを抜ければ光が見える」と教えてあげよう。

自分を表現するというのは本当にむずかしい仕事である。恐れを抱くこととしたい体の動きは鈍くなり、心は混乱する。恐怖が別なものに姿を変えたときはやっかいだ。それを見破る手ばかりを知っておく必要がある。手がかりは自分自身の抵抗である。自分のしたいことに抵抗を感じる時、恐怖が存在する。集中ができなければ、きみのなかに恐怖が存在すると思ってしまう。すべきことをぐずぐず先に延ばしたり、なにかにかこつけてやらんばらんに時を過ごしたりするのは恐怖が存在する徴だ。といっても恐怖自体は悪いものではない。恐怖は危機から人を救ってくれる。しかし、無意識の恐怖は気づくのがむずかしい。無意識のものを意識するのほらせることは、闇のなかで目をあけるようなもので、覚醒の行為の一種とも言える。

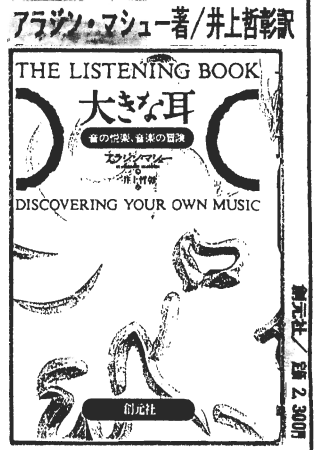
音楽に行き詰ると、心のなかで声がひびく。「ほくには能力がない。もう年をとってしまった。頭が悪すぎる。もう遅すぎる。音楽の才能がない。努力しても意味がない。なんでこんなことを始めてしまったんだらう。ほくはこんなことができる人間じゃない。ほくは役立たずだ。ほくはほかだ。これらのは呼びを聴いてみよう。そしてすばやくベルベットの緞帳を引きよせ、舞台裏にいる感傷的な老いた俳優をみつめるのだ。

これらの呼びのなかでもっとも哀愁に満ちているのは、「ほくには才能がない」という言葉である。これを打破するカギは、「ほくも」でもなく「ない」でもなく「才能」である。電気椅子にでも座ったつもりになって、きみがもちたいと思う「才能」について自分に反対尋問してみよう。「それはどこで生まれたのか？ その親はだれか？」「それはきみの友だちか？ 最後には直接会ったのはいつのことか？」「それはどこかのバンドのメンバーなのか？ そのバンドの名前は？」

生まれつきの才能のまわりを黒い鳥のように不穩に飛びまわる過剰な欲望に、芸術家はつねに用心を払わなければならない。すでに手元にある宝石を磨くことに芸術家は集中しなければならぬのだ。不安からの救い、アクチュアルな音楽にいたる道はほかにはないのである。自分のもっているものを磨くことだ。きみのもっているバイブレーションを洗練することだ。きみの岸に打ち寄せる波を受えよう。きみは自分のサウンドを手に入れることができる。サウンドは大気のなかの光のようなものだ。この光がきみを導くのだ。これこそがほくたちがみなもっている「才能」であり、それで充分なのだ。

音楽に対する恐れ  
より

## BOOK:『大きな耳』



アヲヲ・マシュー著/井上哲彰訳  
THE LISTENING BOOK  
大きな耳  
DISCOVERING YOUR OWN MUSIC  
聴くこと………  
それ自体が  
音楽だ。

## MOVIE:『バンドワゴン』 監督:ジョン・シュルツ 1996年作品 (アメリカ)



“ここっ!”という場面でパチッとキマったセリフに出合えるのが、小説や映画の醍醐味のひとつである。

『バンドワゴン』は、若者たちがバンドを組んでツアーに出るというロード・ムービー。オンボロ・バンの故障あり、失恋あり、メンバー間のイザコザあり。ひょんなことからボーカリストが留置場に入れられ、保釈金を稼ぐために他のメンバーが路上ライブ。

「自分たちの音楽をいじられるくらいなら契約なんかNO!」と、レコード会社の女社長にとんカを切って、演奏を拒否。でも、最後は、やっぱり“音楽がいちばん!”で終わるおきまりのお話。おきまりのお話なんだけど、音楽がよかったし(アメリカのインディーズ・バンドが演奏している)パチッとキマったセリフがいくつもあって、それがとても楽しかった。

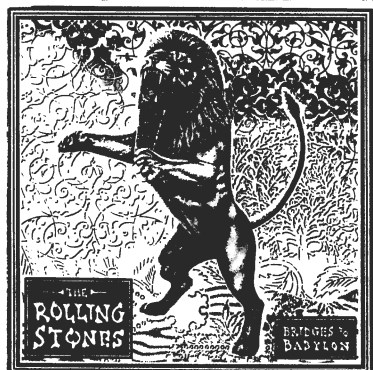
ソングライターでボーカリストのトニーは、人前では演奏ができないという極端に内気な性格で、ガレージで練習をするときですら、一人だけカーテンで仕切った場所に入ってやるのだ。当然、ライブ前はガクガクして。すると、マネージャーのライナスが一言、「大切なのは曲か、客か」。それで解決。とはいっても、ドラムの脇にマイクスタンドを立て、客に背をむけて演奏するのであるが(写真参照)……。

ライナスは、“伝説のマネージャー”といわれる人物で、リード・ギタリストのウィンががいうには「音楽のことをよく知った上でバンドの面倒をみる。いつも突然あらわれては姿を消す。ある日、また別のバンドを率いてる」。ライナスは、「音楽は目的なのか、目的の手段なのか」と質問して、ベーシストのエリックや、ドラマーのチャーリーをとまどわせる。

「俺はバカだ。自己満足で歌を書いていた。彼女の歌だって、勝手に理想化してた」と、留置場に入れられたトニーが同僚の男に心情を吐露する。保釈されたのはいいが、自信をなくしたトニーはパンを降りて、ギターを線路に横たえる。ほかの二人がギターを取りにいこうとするのを止めて、エリックはあくまでトニー自身が取りに行くことに固執する。チャーリーのセリフ、「列車が来たらバンドまで一緒に壊れる」。エリックのセリフ、「奴にその気がなきゃバンドは壊れるんだ」。警笛を響かせ列車が近づいてくる……。どうする、トニー？(これは映画を観てのオ・タ・ノ・シ・ミ)

レコード会社の社長とメンバーたちのやりとり、「今は未加工の素材よ。そのままじゃ売れない。製品に加工する機会が我が社というわけ」「でも歌を聴いてもいない。まず聴いてもらえませんか」「もちろん聴くわ。でもいい？ 歌はビジネスの一部よ」。迷っていたチャーリーも、「きれいごとじゃ食べていけないのよ。最後はビジネスなの」との一言に、「ところがき、それ以上なんだよね」。

## CD: THE ROLLING STONES 『BRIDGES TO BABYLON』



『バンドワゴン』は、バンドを組んだばかりの若者たちが主人公だがTHE ROLLING STONESはもう30年もバンドをやっている。

1981年に、ミック・ジャガー自身が「ロックンロールは終わった。全部終わった……。みんなローリング・ストーンズやビートルズに歯向かうことができないのさ」と言ったにもかかわらず、まだやりつけている。つづけていること自体が価値のあることかもしれない。

『BRIDGES TO BABYLON』を聴くと、「長いことつづけているだけのことがある。さすがだよ!」と叫びたくなるくらいだ。「キース・リチャーズはいいと思うけど」、といった程度で、THE ROLLING STONESが特別好きだったわけじゃない。それが、『BRIDGES TO BABYLON』はどうだ! だいいちに、ミック・ジャガーの歌がいいじゃないか。脂がぬけて、渋いのに艶がある。いままで、ミック・ジャガーの歌を聴いたことなんかなかったんじゃないかって思ったくらい、心にしみいってくる。「ALWAYS SUFFERING」なんて、涙がでるよ。「LET YOUR SOUL COME ALIVE/LET THERE BE HOPE/HOPE IN YOUR HEART/THAT OUR LOVE MAY REVIVE ……」なんて歌われたらね。それと、チャーリー・ワッツのドラム。なんでそんなに真剣にたたいているんだ? 若者の真剣さとはちがって、やみくもの熱気じゃないところがいい。いつもどおりのキースのギターも、メンバーの意気がしっくり合っているから(コーラスでそれがよくわかる)よけいに胸に響いてくる。それと、最後がキースの歌で終わるっていうのも、なかなかのもの。まるで子守歌みたいなんだから。



10. ALWAYS SUFFERING  
LET YOUR SOUL COME ALIVE  
LET THERE BE HOPE  
HOPE IN YOUR HEART  
THAT OUR LOVE MAY REVIVE  
FOR LIFE IS BUT A CHANCE  
ON A WIND SWEEP HILL  
AND THE SEEDS OF LOVE  
ARE SWIRLING ABOVE  
LET THEM BE STILL  
BUT WE'RE ALWAYS SUFFERING  
WE'RE ALREADY LOST  
ALWAYS SUFFERING  
ALREADY LOST